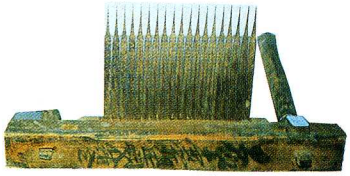
えんぶり……馬ぐわやこまざらいで代かきをしたあと、田植えをしやすいように田の表面を平らにするために使いました。

むかしは、田植えや稲かりは機械を使わず馬や牛を使ったり、工夫した道具で仕事をしました。そのため働く時間が今の何倍もかかったので、朝方うす暗いうちから夕方暗くなるまで働きました。子どもたちも学校から帰ると田や畑の仕事を手伝い、いそがしい時期には農はん休業という休みもありました。

米を作る時に使った道具

千歯こき（大正のはじめまで）



足ぶみだっこく機（昭和30年代まで）

稲かりをしたあと、稲を「さで」にかけてよくかんそうさせてから、「稲こき」をしました。もみは「するす」でひいてげん米にし、げん米は水車小屋などで「ついて」「千石どおし」でぬかをふるいおとして、ようやく食べられる白米にしました。

むかしの作業は共同作業(「ゆい」と言った。)が多く、「水車」や「ばったり」もほとんどの集落にありました。

するす（すりうす）

とうみ

とうみ……もみがらやごみをふきとばすために使いました。